

# KRP PRESS Vol.155

Kyoto Research Park ACTIVITY (2018.10) 特集① KRP-WEEK 2018 特集② 西陣の新しい風

未来につながる実験場  
KRP-WEEK 2018



# KRP-WEEK 2018

7.30 MON ▶ 8.5 SUN PRE EVENT 7.27-7.28

主催：京都リサーチパーク(株)  
 後援：近畿経済産業局、京都府、京都市  
 京都商工会議所、公益社団法人京都工業会、  
 京都産業育成コンソーシアム、京都産学公連携機構  
 一般社団法人京都経済同友会

## ROAD TO 未来につながる実験場

への道。  
 時代の先を見据え、様々な"道"を目指す人々が挑戦できる場として75イベントが9日間に渡って開催されたKRP-WEEK 2018。約7,300人が来場し、交流する中で新たな発見やつながりが生まれた。

75  
EVENTS



### Life-tech 3days

ライフサイエンス分野のエコシステム形成を考える日本の各機関と京都リサーチパーク(株)が連携し、それぞれの取り組みや課題、今後の方針等を共有していく場「Life-tech 3days」をKRP-WEEKで実施しました。ベンチャーエコシステムやオープンイノベーションを切り口にライフサイエンス分野の未来について議論を深めるとともに、新たな着想やつながりを作る3日間となりました。



**[1st day]** 再生医療ビジネスシンポジウム in KRP Part XI  
 再生医療の新たな時代  
 主催：京都リサーチパーク(株)  
 一言紹介：再生医療の新しい波について議論する1日



**[2nd day]** MEDISO 出前相談会@KRP  
 主催：厚生労働省、(株)三菱総合研究所  
 共催：(一社)ライフサイエンス・イノベーション・ネットワーク・ジャパン (LINK-J)  
 一言紹介：医療系ベンチャー・アカデミア12社の相談に対応



**[2nd day]** 神戸医療産業都市におけるベンチャーエコシステムの構築  
 主催：(公財)神戸医療産業都市推進機構、神戸市  
 一言紹介：20周年を迎える神戸医療産業都市の取り組みを紹介



**[2nd day]** 医療系ベンチャー・エコシステムの構築・進化に向けて  
 主催：厚生労働省、(一社)ライフサイエンス・イノベーション・ネットワーク・ジャパン (LINK-J)、(株)三菱総合研究所  
 一言紹介：官民による医療系ベンチャーの育成・支援について



**[3rd day]** 第4回KRICフォーラム  
 オープンイノベーションによる再生医療の産業化を目指して  
 主催：近畿経済産業局 関西再生医療産業コンソーシアム(KRIC)、京都リサーチパーク(株)  
 一言紹介：再生医療の産業化に向け更なる発展につながる場

### Special comment

毎年進化を重ねるKRP-WEEKですが、今年度はLife-tech 3daysとして、京都リサーチパーク(株)を中心としたライフサイエンスの集積を大いに示す取り組みとなりました。近畿経済産業局も再生医療の発展に向け、オープンイノベーションをテーマとしてKRICフォーラムを開催しました。ライフサイエンスの産業化には、周辺産業を含めた様々なプレーヤーとの連携が不可欠です。KRP地区が、多くの人と情報が行き交うイノベーション創出の場として、今後ますます発展されることを期待します。



経済産業省 近畿経済産業局 局長 森 清氏

### KRP-WEEK 2018 EVENT REPORT

イノベーション創出と交流の場づくりを目的に開催したKRP-WEEK 2018。それぞれのイベントレポートをWEBに掲載しております。ぜひご覧ください。

<https://www.krp.co.jp/krpweek/report/>



### 今年もたくさんの ご来場ありがとうございました

KRP地区内の方々の様々なイノベーション活動を皆さまにご紹介したい思いで2011年からスタートしました。おかげさまで今年は75イベント、約7,300人の方にご来場いただきました。本当にありがとうございます。来年はKRP地区30周年!KRP-WEEKも更に飛躍できるように企画していきます。



京都リサーチパーク(株) 執行役員 鈴川 和哉



## KRP-WEEK シンポジウム

### “未来のつくり方”を語る

～海外スタートアップ × 日本企業 オープンイノベーションの今～

主催：京都リサーチパーク(株) 共催：(独)日本貿易振興機構(ジェトロ)

企業カルチャーが異なる者同士が協業することの可能性とは。

日米のオープンイノベーション事例に詳しいMitch Kitamura氏の講演を皮切りに、KRP-WEEK2018の開幕を飾るシンポジウムが開催された。



#### ①基調講演

### シリコンバレーのオープンイノベーション最新事情

講師 Mitch Kitamura氏 / Draper Nexus マネージングディレクター

Draper Nexusは「大企業のオープンイノベーション支援」をミッションに掲げ、設立以来、日本とシリコンバレーをまたいだB2Bの分野への投資やイントラプレナー、つまり事業会社内で起業家マインドを持った人材の育成を特に重要と考え、そのためのプログラムを提供している。

優秀な人材、チャレンジの文化、それを支える資金。この3つが揃ったシリコンバレーには、世界中から多種多様な経験を持った人たちが集まり、シリコンバレーにオフィス構えた日本の事業者数も過去最高を記録した。スタートアップが急速に拡大し、イノベーションの創出がさらにスピードアップするなかで、事業会社とスタートアップのパワーバランスが大きく変わってきている。今までは資本も

リソースも多く持っていた大企業が優位であったが、今では、優秀なスタートアップに世界中の事業会社がラブコールを送っているのだ。つまり、事業会社はスタートアップに選ばれる存在になるために、常に考え続ける必要がある。

大企業とスタートアップは、哺乳類と昆虫ぐらいい違う。具体的に言うと、企業の寿命が違うことにより、製品が出来上がるスピードもその品質もお互いが持っている常識とは大きく異なっている。その違いを乗り越え、オープンイノベーションを成功に導くには、オープンイノベーションを受ける社内体制を整えること、ビジョンの共有、クローズとオープンのパワーラインをクリアにすることの3つが不可欠である。



Profile  
Mitch Kitamura氏  
Draper Nexus マネージングディレクター

滋賀県大津市出身。ボストン大学にて経済学修士。(独)ジェトロを経て、2000年に日本のベンチャーキャピタル(JAIC)に参画。2011年にシリコンバレーと東京に拠点を置くDFJグループのベンチャーキャピタルとしてDraper Nexus Venturesの立ち上げに参画。米国と日本を中心に先進的なビジネスを展開する有望なスタートアップ企業への投資、成長支援を通じ、日本の大手事業会社とスタートアップ企業のオープンイノベーション活動を支援する。

#### ②クロストーク：協業事例

### シリコンバレーのスタートアップ企業と日本企業のコラボレーション事例

実際の協業事例として、ロボットのモジュール化プラットフォームの構築を目指す「カンブリア」及びカスタマイズできるロボット(オムニ)を提供するオムニラボのThuc Vu氏が登壇。誰でも参加できる「カンブリア」では、開発された技術を使って、新たな技術の開発や商用化をさまざまな人々と協力して行うことができる。コミュニティの形でビジネス、企業をつなぎ合わせることで技術の商用化の近道をつくると同時に、知的財産権を守り、盗用ができない仕組みづくりにも注力。活用の可能性は大きく、AIとロボティクス分野を中心に、ドローンや

バイオメディカル分野への進出もめざしている。「カンブリア」の紹介と合わせ、ロボット(オムニ)のデモンストレーションも行われた。続いて凸版印刷(株)の朝田氏が、オムニラボ、東京大学層本研究室と共に進めている5Gを活用した遠隔体験ソリューション「IoA仮想テレプレゼンテーション」を紹介。IoA(Internet of Abilities)とは、人間とテクノロジーが一体化することで時間や空間の制約を超えて相互に能力を活用し合えるネットワーク環境のこと。そのプラットフォームを築いていく上で、オムニラボとの連携が欠かせないと語った。



#### ③クロストーク：パネルディスカッション

### 海外スタートアップと日本企業による“未来のつくり方”の有効なしかけとプログラム

協業における課題や注目すべきトレンドなど、奈良氏からパネリスト各氏への問いかけに対し、それぞれの視点から未来につながる展開を探った。

協業相手に日本企業を選んだ理由としてThuc氏は、「ロボティクス分野で日本は夢の市場」であるとした。さまざまな領域に浸透し成熟していると同時に、「高齢者介護に価値を提供できる」日本の人口動態がオムニラボに合っているという。凸版印刷(株)とは、先進的な考え方やオープンな企業体制など、共通点が多く、シナジー効果を期待できると話した。ただ、シリコンバレーのスピード感に比べて動きが遅いように感じるとも

語り、速度の重要性という課題が浮かび上がった。課題として、朝田氏は、社内部門間のコミュニケーションの難しさ、新規事業担当者が社内を説得することに労力がかかる点を挙げた。岡橋氏は、バイオ・ライフサイエンス系の領域とその他のITや工学などの領域との異分野融合(いわゆる「医工連携」)の必要性や、IPOのみならずM&Aによるexit事例の創出を増やしていくべきとした。

朝田氏はイスラエルを拠点とするスタートアップに注目していると語り、イノベーションのグローバル化についてシリコンバレー以外のエリアにも新しい時代の流れを見出ししていきたいと語った。



モデレーター  
奈良 弘之氏  
(独)日本貿易振興機構(ジェトロ)  
知的財産・イノベーション部  
イノベーション促進課長



パネリスト  
岡橋 寛明氏  
みやこキャピタル(株)  
代表取締役パートナー  
イノベーション推進課長



パネリスト  
Thuc Vu氏  
CEO and co-founder  
of Kambria and  
OhmniLabs



パネリスト  
朝田 大氏  
凸版印刷(株)経営企画本部  
フロンティアビジネスセンター  
戦略投資推進室長

#### イベント参加者の声

##### 自分たちの世界とは違う 新しいスタートアップの登場を知り刺激に

私は、起業するには、誰もが考えそうな独自の発想が不可欠と考えています。今回のシンポジウムでは、海外のいろいろな新しいネタを持って起業したスタートアップの例を紹介いただき参考になりました。また、自分たちの世界と違う新しい形のスタートアップの登場を知り刺激を受けました。一方で、今後、それらのスタートアップがどのようにして企業を発展させていくかが今後の大きな課題になると感じました。



スフェラーパワー(株)  
代表取締役会長  
中田 丈祐氏

##### スタートアップ支援のあり方も 環境に合わせて変えていく必要が

Mitch Kitamura氏をはじめ、シリコンバレーの第一線で活躍されている方々のお話は臨場感があり、また、プロトタイプ段階からどんどん進んでいくシリコンバレー企業のスピード感には驚かされ、大変刺激になりました。イノベーションのスピードが加速していき、スタートアップを取り巻く環境が激変していく中、日本でもスタートアップが企業を選ぶ段階にきており、本市のスタートアップ支援のあり方も、環境に合わせて変えていく必要があると感じました。



京都市  
産業観光局新産業振興室  
係長 西村 貴文氏

特集  
- 2 -  
西陣の  
新しい風

## 伝統はイノベーションの連続から生まれる

「西陣」という名称が誕生して550年が過ぎた。その名が、応仁の乱の際に西軍の陣が置かれたことに由来することは、よく知られている。ただし織物の町としての歴史はさらに古く、1000年以上前に遡るといえる。長い歴史は多くのものを生み出してきた。先染め織物という西陣織ならではの華やかで重厚感ある表情。エリア内に分業工程のすべての職人が集まっているという、独特の形態。現在ある西陣織、あるいは西陣機業の姿は、ただ1000年を、550年を、歩むだけでは生まれなかった。他の織物産地に先駆けて西洋の技術を導入し、先進のテクノロジーも積極的に取り入れてきた。歴史の長さではなく、新しいものや新しい考え方の提案にこだわってきた。伝統の上に変革と革新を重ねてきた歴史は、まさにイノベーションの繰り返りだったといえる。不振の時期にもつねにほかでは真似のできない技術とセンスで再生に成功してきた西陣機業の、イノベーションのDNA。西陣織工業組合理事長である渡文(株)代表取締役社長・渡邊隆夫氏に、西陣機業の現状と課題、将来へのビジョンなどについてお話を伺った。

## 世界に誇れる西陣の伝統の技を、さまざまなカタチで未来へ

西陣織工業組合 理事長/渡文(株) 代表取締役社長 渡邊 隆夫氏

### 同業者組合から地域組合へ 西陣産地に求められる取り組み

京都市の北西部、上京区と北区を中心とする地域に約380の業者が集まって、西陣というエリアを形作っています。つまり、西陣は中小企業集団というわけです。そして、ここで生産される西陣織の年間出荷額は320億円と、現在厳しい状況にあります。生活スタイルの変化によるきもの離れ、職人の高齢化、後継者不足などクリアしなければならない課題は多く、市場の縮小が続けば、西陣なら



ではの産業構造である分業生産体制の維持も難しくなっていきます。こうした状況は過去にもありました。東京遷都により大変な苦境に陥った明治初期と、昭和初期の金融恐慌から第二次大戦に至る時代。しかし、そのいずれも斬新な発想とチャレンジで乗り越え、再生してきたように、今また新たな取り組みが西陣のあちこちで起こり始めています。

西陣はかつて巨大な産業集積地であり、京都市でNo.2の街でした。西陣織という核となる産業があり、織屋を中心に地域文化が発達しました。しかし今では地域力も落ち込んでしまった。同業組合として資質の向上や啓蒙、親睦などを図ってきた西陣織工業組合も、その役割を見直さないとはいけません。職人の街である西陣では、日々の食事づくり



クラフト感のある独創的な帯は渡邊氏の作品

の時短と省力化を受けて仕出し文化が発達したり、主要な交通網からは離れたために開発が進まず、今も昔ながらの街並みが多く残っていたりします。そんな衣食住や上七軒の花街の文化など、街全体が有する魅力を、西陣織の新しい取り組みとともに発信すること。地域全体で産業を支える地域組合として、求められているのではないのでしょうか。同業者組合から、地域組合へ。西陣織工業組合は今、その岐路に立っています。

### 西陣の技術があれば 「世界初」は簡単につくれる

西陣織は、多品種少量生産方式を基盤とした先染めの織織物です。先に糸を染めて、染めた糸を使って織り上げることで複雑で厚みのある文様表現が可能になり、重厚感が生まれるのです。生地を織り上げるまでには数々の工程があり、さまざまな人の手と



紋紙やフロッピーディスクとジャカードによって模様を織り出す。織機には先人の知恵と経験が詰まっている。

職人の技が加えられます。たとえば、ジャカードの指令に基づいて経糸を引き上げ、緯糸が通るようにする綜糸や、節があるイレギュラーな経糸を使いこなすなど、西陣では当たり前に使われている技術が、じつは西陣でしかできない独自技術であることもしばしば。つまり、業界初のものをつくると、そのまま世界初のものになるのです。西陣では「世界初」は簡単につくれるということです。

西陣で敬意の対象とされるのは、誰も考えつかなかったものをつくりだすこと。人の真似を



刺繍のように見える立体感ある織文様は西陣織ならではの

することは恥だという考えが昔からあり、それが西陣織の面白いところでもあります。創意工夫と独創性。しかし独創性といっても、無から有を生み出すのは難しい。たとえば、古今東西のデザインソースがあり、それをどのように帯に展開するかという「ひらめき」が独創性につながっていきます。そして「ひらめき」も、何もないところからは生まれません。今まで何を見て、何を感じ、何を考え、何を自分のものにしてきたかという経験の蓄積こそが

重要なのです。何もないところに何かを生み出す魔法使いにはなれなくても、今ある何かを新しいものに変える手品師にはなれる。何かをヒントに創造と変革を重ねてきた西陣には、そうした精神が土壌としてあるのかもしれない。

西陣は「和」の産地です。きもでの勝負は続けていかないとはいけません。一方で、西陣の技術をいかした新しい展開を進める必要があります。その両輪にチャレンジしていきます。

CASE  
1

## 西陣から世界唯一のウェアラブルIoT トータルソリューション企業へ

ミツフジ(株) 代表取締役社長 三寺 歩氏

今年春、経済誌Forbes JAPANによる「スモール・ジャイアンツ・アワード」において大賞を受賞した、ミツフジ(株)。世界が注目するウェアラブルIoT企業に通底する西陣のDNAとは。

### そのルーツは西陣織 繊維を基軸にさまざまな変化を重ねて

非常に高い導電性能を持つ銀メッキ繊維AGposs®。弊社の核となる製品です。この銀メッキ繊維を織り込んだウェアラブル端末を開発し、医療や介護、スポーツなど世界のさまざまな分野で高評価をいただいています。スモール・ジャイアンツ大賞も、AGposs®を使用したスマートウェア、取得したデータを無線送信するトランスミッター、データを解析するアプリ・クラウドまでをすべて自社で開発するワンストップソリューションとして開発したhamon®が、高く評価されたものです。

ミツフジの前身は、1956年に祖父が創業した西陣織の帯製造工場です。その後、西陣機業からラッセルレースやテーブなどの製造へ転換しますが、ご存知のとおり繊維産業は斜陽化の道をたどります。父が始めた銀メッキ繊維事業で息を吹き返したかに見えたのですが、競合製品の登場などにより事業規模を年々縮小するしかありませんでした。もともと家業を継ぐつもりはなかったのですが、自分を育てて大学まで行かせてくれた工場をこのまま廃業させることはできないと悩んだ末、2014年に実家に戻ったのです。

まず、赤字の取引を全て停止し、銀メッキ繊維に絞りました。銀メッキ繊維の取引先に含まれていた世界的企業の研究所を訪ねた際、「こんなに導電性のいい糸はない」と絶

賛されたからです。彼らからウェアラブル端末の研究に銀メッキ繊維が役立つことを教わり、その開発に賭けることにしたのです。

ただ、銀メッキ繊維がいくらよい素材でも、素材だけ、用途開発だけでは、未来は広がらない。そこで最終製品を作ることをめざしました。当時、IoTやウェアラブルというキーワードがもてはやされてはいましたが、なかなかニーズにマッチした製品がなく、マーケットが広がらない状況でした。その理由として、デバイス、アプリ、クラウドなど、それぞれの開発や製造が各社に分散されているからと考えました。そこで、繊維からウェアラブル端末という最終製品、さらにクラウドまで「完全自社開発」をすることを決意。そうすることで、各パーツの開発に小回りが利き、スピード感ある製品開発が可能。ウェアラブルをすべて自社開発しているのは、世界で唯一であり、弊社の強みでもあります。

### 可能性を拓き、さらに新しい道へ 生きるための変化が 大きな変革のうねりに

現在は、銀メッキ導電繊維AGposs®を使ったウェアで、生体データを取得することで、着用者の体調を管理するソリューションをご提案しています。主に、建築現場や工場、造船所など、過酷な現場で働く方々の体調見守りや、介護施設のお年寄りの見守りなどにご利用いただいています。それに加え、現在は、アスリートのコンディショニング管理に利用できるウェアの開発も進めています。運動時だけでなく、普段の睡眠時データとパフォーマンスの関係性や、食事と生体データの関係性など、様々なことが解明できれば、効率的なトレーニングに直結すると考えて



います。また、ともすれば危険と隣り合わせのトレーニングを少しでも安全にできるのではと思います。最近では、子どもたちの運動時の体調見守りとして利用したいというお問い合わせも頂いていますので、市場ニーズはかなり広いのではないのでしょうか。

### 伝統産業から 未来を切り開くために必要なこと

今の時代、業種間の垣根というのは限りなくなくなっていると思います。また、企業間の技術共有も進んでいるのではないのでしょうか。伝統技術は守るべき文化として大切ですが、それを発展させるためには、様々な垣根を取り払い、目的のために何が必要なかを考えることが大事だと思います。私自身、繊維業からIoTという一見畑違いの分野に乗り出す際、先のことは全く分からなかったのが正直なところ。ただ、自分自身を顧みると、これまでの経歴がパーツのように組み合わせると、道が繋がっていると感じました。そのパーツが分かれば、もし自身が持っていないとしても、他から持ってくればいい。私たちが道途中ですが、そうやって一步一步進んでいくうちに未来は切り開かれていくような気がしています。

### ▶ マテリアルから、デバイス、アプリ・クラウド開発までのトータルソリューション



銀メッキ導電性繊維「AGposs®」



hamon®ウェアの開発



トランスミッターの開発



アプリ&クラウドの開発

CASE  
2

## 西陣織の技術で炭素繊維を織る。様々な分野で次世代に役立つ製品を実用化

(有)フクオカ機業 代表取締役 福岡 裕典氏

炭素繊維をジャカード織機で織り上げる。機能性と品格を兼ね備えた新しい紋織物が広げる、西陣織の可能性について話を聞いた。

### 炭素繊維で織りなす西陣織 高い意匠性はフクオカ機業ならではの

軽くて強く、耐久性があり、導電性や寸法安定性、生体親和性が高いなど優れた機能を持つ炭素繊維は、複合材料としてさまざまな分野で活用されています。この炭素繊維と



伝統的な西陣織の職人技が若い世代に継承されている

西陣織の技術を組み合わせる新しいテキスタイルをつくり、提案しているのが、弊社です。

代表取締役役に就任した1998年頃は和装需要の低下が著しく、帯の製造とは別にもう一本、柱となる事業が必要でした。弊社だけの問題ではなく、550年続く西陣というブランドを残していくために、新しい取り組みが必要だと考えたのです。そうして模索するなかで大きな可能性を感じたのが、炭素繊維。西陣織の技術で炭素繊維を織るのです。炭素繊維は非常に丈夫で、どんなに引っ張っても切れません。しかしその一方で、折れや擦れに弱い。経糸と緯糸が交差する織物では、織る際に繊維同士が擦れて毛羽立ってしまい、なかなか製品にならないのです。西陣でも多くのメーカーが炭素繊維の導入を試みながら



ことごとく失敗したのは、それが原因でした。弊社ではこの毛羽立ちを抑えるため、10年かけて織機を改良。摩擦に弱い炭素繊維の織物を、安定して生産できるようになりました。

従来つくられていた炭素繊維の織物は、経糸と緯糸が単純に交差した平織と綾織しかありませんでした。そんななか、弊社がつくるのは、西陣織の本分である、美しく繊細な文様を織り出したジャカード柄のテキスタイル。今までにない素材で新しいものをつくりたいと試行錯誤を重ねた末、事業化できるようになるまでに15年かかりました。しかし15年かけて完成させた技術は、他社にはけっして真似のできない、フクオカ機業だけの独自技術。炭素繊維を使って意匠性の高い織物を織ることができるのは、世界でも弊社だけです。



12台ある織機のうち4台で炭素繊維の織物が織られる。105cm幅の織機はネクタイを織っていたものを改良した。

### 西陣織の技術をいかして 世界でさらなるチャレンジを

国内や欧米の自動車メーカーと、自動車の内装材のためのテキスタイル開発が進んでいます。炭素繊維に異素材繊維を織り込むのですが、組み合わせる素材や、見る角度によって、色合いが変わる。そんな魔法のようなテキスタイルが、デザイナーのイメージを刺激するのでしょうか。また、コンピュータ制御された織りプロセスにより、お客様が求める意匠デザインを織物として忠実に再現。さらに、本来炭素繊維は黒一色ですが、好きな色に着色できるガラス繊維や金銀糸を緯糸に使用することで、色彩豊かなテキス



ジャカード織機が織りなすデザイン性の高さが魅力

タイルを織り上げることも可能になりました。昨年、伝統的な花の文様を織り出したテキスタイルを樹脂で固めて椅子に仕立て、ミラノサローネ国際家具見本市に出展。実験的なチャレンジでしたが、海外メーカーからの高評価という結果に結びつきました。今までにない素材による、新しいものづくりですが、その裏側には西陣の伝統、職人の技術という、

独自の優れた文化があります。「西陣」は世界に通用するブランドなのです。

弊社は、1902年に当地で創業してから116年になりますが、じつは帯メーカーとしては後発組です。海外向けの洋服生地製造からスタートし、第二次大戦中にはパラシュートの生地もつくっていました。ネクタイやマフラーを製造するなど、もともと、いろいろな素材を扱うのは得意という下地があったのです。そして、それはどれも、西陣の技術に支えられたもの。西陣織は、何よりも「技術」です。技術をいかして、その時代に合ったものをつくっていくべきで、和装にこだわらなくてもいいのではないかと考えています。

CASE  
3

伝統産業をクリエイティブ産業へ、世界に向けた革新的なテキスタイルを開発

(株)細尾 常務取締役 細尾 真孝氏

西陣織という伝統織物に対する固定概念を外す。見方を変える。そうすることで生まれる西陣織の新しい価値と創造性の広がりについて伺った。

西陣織という伝統工芸の  
クリエイティブ性の高さを知る

西陣織は、非常に複雑な構造を持つ織物です。太い糸や平らな糸など異なる種類ごとに織り分け、それが何層も重なる多層構造。そして織り上がった表面には立体感が生まれる。完成するまでに要する20の各工程をそれぞれ担う熟練の職人がいて、連携しながら西陣の街全体でつくり上げていく。世界の織物のなかでも類を見ない複雑な構造体は西陣ならではのものです。かつての自分は、なぜ、そのクリエイティブ性に気づけなかったんだろうと思います。

もともと家業を継ぐつもりはありませんでした。元禄年間創業と伝わる西陣織の老舗ですが、和装とか伝統というものはコンサバティブなものという思いもあり、ずっとクリエイティブなことをしたかった。音楽活動の傍ら、音楽とファッションとアートを融合させたブランドを



(株)細尾の西陣織を使ったスーツ(2012年パリ・コレクション)ファッション業界でも脚光を浴びている



高級ホテルのインテリアにも(株)細尾の西陣織は使われている

立ち上げたりもしました。しかしマネージメント力の必要性に気づき、自分をアップデートし直そうと、大手ジュエリーメーカーに就職して生産管理や商品開発を学んだのです。

3年ほどたった頃、父が、海外向け事業に取り組み始めました。パリのメゾン・エ・オブジェに西陣織をソファに張って出品し、高評価を受けたそうです。「日本のブランド、日本の文化で勝負できる」。そのクリエイティブ度数の高さに気づき、家業に戻って西陣織に携わろうと決意したのは、このときです。

伝統の強みは懐の深さと広さ  
新しいことを飲み込むパワーがある

3人の職人さんと、海外向けに和柄のクッションをつくり始めました。オーダーは入るもののなかなか事業化に結びつかない。試行錯誤を繰り返すなか、2008年に転機が訪れました。パリのルーブル宮国立装飾美術館で行われた展覧会に本業の帯を出品。その巡回展を観た世界的な建築家であるピーター・マリノ氏から、「西陣織の帯の技術を使ってテキスタイルをつくりたい」というメールが届いたのです。彼は西陣織を、本来もつラグジュアリー感が生きる、テキスタイルの素材ととらえていました。和柄の商品でないと勝負できないと思い込んでいた私に、素材としての西陣織と技術の可能性に気づかせてくれたのです。

西陣織の帯幅は32cmなので、生地に継ぎ目が生まれます。そこで、継ぎ目が生まれ

広幅の生地をつくろうと、1年かけて150cm幅の織機を自社開発。その結果、世界100都市のディオールのお店で弊社の西陣織が壁面を飾ることになったのです。西陣の技術と素材をベースにした世界標準の布をつくることできれば、海外のラグジュアリーマーケットで戦えると確信しています。

インテリア、ファッションに加え、2014年からは現代アートとのコラボも展開。さらにマサチューセッツ工科大学での共同研究を通じ、西陣織とテクノロジーの融合にもアイデアが広がります。バイオテクノロジー×西陣織では、クラゲのDNAを蚕に組み込んだ新しい素材での西陣織を。最新コンピューティング×西陣織なら、AIを使って織物のストラクチャーをつくる。150年前に西陣の先人が命を賭けてジャカード技術を持ち帰ったように、つねに最先端の技術を求め、挑戦して、変わり続ける。それが西陣の姿です。そして西陣織にはまだまだ可能性がある。よく知られた織物ではなく、世界がまだ知らない技術＝素材がある。それが西陣織なのだと思います。



CASE  
4

西陣織金襴を現代の生活にフィットしたカタチとして活用したい

(株)もりさん 商品企画 Chief Planner 山田 由英氏

織元としての技術の継承、ポリエステル糸で織るという独自技術、さらに京都職人工房での研鑽…。(株)もりさんの変革の歩みとは。

金襴の可能性を広げるのは  
変えるのではなく「活かす」という視点

弊社は、大正10年(1921)の創業以来、一貫して西陣織金襴の製造・卸を行う織元です。金襴はもともと、袷袢や仏具など仏教用やひな人形の衣装などに使用される生地。



古典柄を現代風にアレンジしたテキスタイル

文様が浮き出るように織られたその風合い、多彩な文様と色使いが特徴で、芸術性の高い織物でもあります。弊社では、この金襴を、経糸緯糸ともに100%ポリエステルで織り上げる技術を開発。西陣織のブランドとしては、他社にはない技術です。

軽く、丈夫で、色落ちしないポリエステルの金襴生地。その特性をいかして、キャラクター商品のOEM製造など二次商品への展開も始めました。ただ、弊社はずっとメーカーとして、織物を織って納めるというスタイルでやってきたので、そこから先のやり方が分からない。金襴という可能性を秘めた素材を織るだけで、活用するという視点がなかったわけです。社内で商品企画に当たるのが私だけという環境もあって壁に突き当たっていた2年ほど前に「京都職人工房」を知り、そこでいろいろ学ばせていただくようになりました。写真の撮り方やライティングの方法、パッケージングの大切さなど、知らないことばかりであることを痛感しましたが、それはそのまま、私自身と



もりさんの成長につながったと思います。従来展開していた和小物などのライフスタイル雑貨に加え、アパレルへの進出も考えています。京都職人工房でのプレゼンテーションがきっかけとなって、大阪のアパレルメーカーとの商品づくりも進行中です。また京都リサーチパーク(株)からお声掛けいただき、イスラム教徒の礼拝用マットを西陣織金襴でつくっています。アパレルへの展開、アジアへの進出など、今後はより積極的に西陣織金襴を活用し、職人さんの工賃アップにもつながるような企画を考えていきたいですね。

京都府伝統産業若手育成事業

京都職人工房 KYOTO CRAFTSMEN STUDIO

伝統産業の未来を担う  
若手職人の育成を目的として  
2012年開設

京都職人工房は、次世代の職人たちを「未来志向の工芸の担い手」へと育て、京都の伝統産業を活性化させる事業です。京都府伝統産業若手育成事業として2012年に設立され、京都リサーチパーク(株)が事務局として運営しています。

若手職人たちが異なった目的を持ちつつも同時代的な意識の中で集い、様々な技術やセンス、悩みやアイデアを持ち寄ることで自ら考え行動し、新たな世界を知ること、常に革新される伝統の担い手となるための実験と実践を繰り返す場を作っています。

本来職人が持っている「作る力」を商品開発やブランディングのセミナーに伸ばし、写真撮影・文章表現といった「伝える」技術も専門家による講座でサポート、さらにそれらを「売る」ための実践として展示会への出品も企画しています。

また、職人工房には染織・陶磁器・漆芸・神仏具といった伝統工芸の職人だけでなく、デザイナーやアーティストなど業種を越えた作り手が参加し、メンバー間でも活発な交流が行われています。

6年間の様々な活動を通じて、京都から工芸の魅力をより発信し、マーケットへと広げていくことを目的に、展示販売会「DIALOGUE」が生まれました。京都を中心に全国から伝統的な背景をもつ作り手が集まり、作品やその背景をプレゼンテーションし、バイヤーやデザイナーなどものづくりに関わる方々や一般の方々との



京都リサーチパーク(株)京都職人工房ディレクター 山崎 伸吾



今年もホテルカンラ京都を会場に2019年3月7~9日に開催します。現在出展者募集中です。  
<http://kougeinow.com>

交流を行います。2019年3月に開催する2回目の「DIALOGUE」は、「親密な工芸」をテーマに物と人との関係を「工芸」を通じて見つめていきます。作家や職人など作り手たちとの出会いの中で、彼らの息づかいとともに、現代の京都の暮らしや文化に触れ特別な体験に出会える、そんな場を提案していきます。

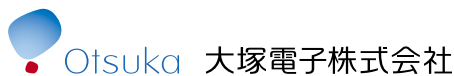
【京都職人工房HP】  
<https://www.krp.co.jp/sangaku/kobo/>  
【京都職人工房FB】  
<https://www.facebook.com/krp.shokunin/>

# Newcomers



KRP地区に入居された  
新しい企業様のご紹介です

KRP 4号館



## 光を使って「測る」「診る」

### 大塚電子株式会社

大塚製薬グループの会社です。  
「光でモノを診る会社」として、皆さまの健康に貢献する診断装置やナノサイズ粒子の物性分析、そして、新素材、半導体分野の品質・膜厚計測など幅広く開発・製造・販売を行っています。ショールームを開設しました。お気軽にご見学、コラボレーションなどご相談ください。



非接触光学厚み計

nanoSAQLA

代表取締役社長 田口 賢

TEL:075-312-1777 FAX:075-312-1778

URL:https://www.otsukael.jp/

MAIL:webmaster@otsukaele.jp

業種:機械/装置/器具

一押し商品:多検体ナノ粒子径測定システム nanoSAQLA、非接触光学厚み計



スタジオ棟/KRP BIZ NEXT



## 東南アジア向けの広告配信を強化、 広告クリエイティブ制作を行う新拠点 「京都グローバルクリエイティブセンター」を開設

### 株式会社サイバーエージェント

インターネット広告事業において、東南アジア向けの広告配信を強化するため、東南アジア向け広告の新たなクリエイティブ制作拠点「京都グローバルクリエイティブセンター」を開設。東南アジア諸国への広告配信および、高品質なクリエイティブの量産体制を整える。当社が強みとするクリエイティブ力を活かし、幅広くインターネット広告の新しい価値を日本国内のみならずグローバルに提供できるよう努めてまいります。

代表取締役社長 藤田 晋

URL:https://www.cyberagent.co.jp/

業種:ICT(サービス)

## 開催決定!



### 【開催期間】2019年 7月29日(月)▶8月4日(日)

KRP-WEEKは、「イノベーションの創出と交流の場づくり」を目的に2011年より開催しています。来年度のイベント企画をお待ちしております!

お問合せ  
京都リサーチパーク(株) KRP-WEEK 事務局  
【TEL】075-315-8485 【MAIL】krp-week@krp.co.jp  
【URL】https://www.krp.co.jp/krpweek/

※実施日は諸事情により変更になる場合がございます。

## INFORMATION

### 環境配慮へのご協力をお願い

京都リサーチパーク(株)では、環境問題への取り組みとして「KESステップ2」の認証を受け、環境への影響を低減させる活動を継続しています。地域及び地球環境との調和の実現に向けて、省エネ、節水、廃棄物の分別・削減等、環境に対する負荷の低減に、皆さまのご配慮とご協力をお願いします。



### ●KES について詳しくはコチラ

KES・環境マネジメントシステム  
スタンダード公式サイト  
http://www.keskyoto.org/kesinfo/

編集  
後記

取材中によく耳にした「伝統はイノベーションの繰り返し」という言葉通り、西陣では、世界に誇る高度な技術や製品の美しさといった伝統を守るだけでなく、そこから新しいものを生み出そうとチャレンジを繰り返しておられました。こうしたひたむきに

挑戦されている方々に会えるのがKRP PRESSの楽しさ・やりがいです。取材時のイベントの熱気や取材させていただいた方の人柄をそのまま読者の皆様にもお伝えできるようにKRP PRESSも挑戦を繰り返していきたいと思います。(K.K)

vol.155  
October  
2018

**KRP PRESS** www.krp.co.jp/pub/

バックナンバーはこちらをご覧ください ▶



○編集・発行/京都リサーチパーク株式会社

〒600-8813 京都市下京区中堂寺南町 134 番地 (ASTEM 棟4階) TEL:(075) 315-9333 FAX:(075) 322-5348

○編集長/鈴木 和哉 ○取材・編集・デザイン・制作・印刷/株式会社情通レゾナンス ○配送管理/有限会社セクレタリアット

配送・停止・変更のご希望は、  
右記内容を明記の上  
krppress@krp.co.jpへ

配送 ①〒、住所 ②団体名 ③部署名 ④お名前 ⑤TEL/FAX ⑥メールアドレス ⑦「配送希望」 ※定期配送も可能です  
停止 ⑧ご登録No.(封筒宛名ラベル右下) ⑨「配送停止希望」  
変更 ①~⑥のうち変更箇所と⑧のご登録No.

